コメント

いじめから考える子ども集団と社会イメージ

教育学研究科
金　馬　国　晴

はじめに　ーいじめ問題にどう向き合うか？ー

いじめる方もいじめられる方もほとんどの子が経験するという説を、滝氏はある学年のアンケート結果を使って示した。団塊ジュニアの自分にも経験があるが、今や「いじめのある人間関係」以外が想像できないという子もいるだろう。かつて『いじめを発達のバネに』(西尾恒敬他、1985年、あけび書房)と題した本などがあった。だが近年の、自殺に導かれる程のいじめはむごい。プライドや人間の尊厳を意図して損ねる「精神的」ないじめ方が、次々開発されていく。大久保氏がいうように、今や2ちゃんねる等ネットも使ったいじめが編み出されている。

だが、誰かが必ずいじめられなければならない、とは限らない。滝氏が「未然防止」こそ早期発見より重要と強調された点には、各参加者も感想文で目立ってふれていた。理想的には「いじめなき集団」もあると願い、実際めざしたいではないか。いじめの経験がないと断言する学生もいることもまた事実なのである。

現実は、大人の社会にもあるいじめ

とはいえ、すぐに反論もあろう。大人にもいじめがあるのが現実だから、子どもがするのも仕方ない、会社の上司－部下関係や同僚間で、また学校教員の間にもあると。当シンポのコメントで示した、ある自治体の「職場におけるいじめ・ハラスメント対策セミナー」といったチラシは象徴的だ。いじめは人間に備わる資質の一つ、動物としての本能といった発言もきかれた。だが意図をして、リストラの手段にいじめを使う会社も存在する。

こうなると特に、いじめの原因を、個々人の心に押し付けてはなるまい。社会(あるいは、システムといえるもの)の問題として捉える必要があるのだ。

システムというものを、私はまず、政治、経済の論理が貫徹しつつ自動的に運動する社会と見る。システムは人間個々人が関わって成り立っているにもかかわらず、彼らを一方向に縛り、行動させるものになる。政治(権力、支配－従属、秩序)、経済(市場、利潤、効率)が優先で、個人の生活、個人同士のコミュニケーションを次々、疎外してしまうのだ(システムによる「生活世界の植民地化」。J・ハーバマス)。

子どもと学生の集団の今ー「ノリ」に合わせる

近年の子ども集団も、ある種のシステムに呪縛され、いじめをせざるをえなくなっていないか。

その点を言い当てているのが、内藤朝雄(明治大准教授)の論と見る(以下、子ども向けの『いじめの直し方』2010年、朝日新聞出版や、『いじめの構造』2009年、講談社現代新書他多数より)。彼は原因論として、「ノリ」に注目する。「今ここでいじめに入っておかないと乗り遅れる」と、雰囲気に合わせざるをえないというのだ。「誘って断れなかった」といった約束云々はない。

いじめの原因論といえば、かつて教育社会学者の森田洋司・清永賢二が、被害者、加害者、観衆、傍観者からなる同心円と仲裁者からなる構造を提案して注目された(『いじめ－教室の病』、新訂版は1994年、金子書房)。だが何か言い当てていない面も感じてきた。

内藤は、いじめが構成されていく過程を描き足したともいえよう。今回こうした説を紹介したところ、パネラーも参加者も共感していた。参加者の学生が、実際のいじめの心理を補足した発言をしてくれた。

> 「個人でなく集団を保っていくため、友だちでいるため、もっと仲良くなるために敵をつくって、またはいじめられた側がいじめられたくないから、集団に加わることで自分の身を助ける。ノリの理論を考えると、子どもがノリから出ると身を保てない。」

内藤は、大人と異なる善悪の基準を見出して、「ノリ」に合わせる／合わせないことこそ絶対不可侵、と子どもの世界を分析した。滝氏が示した「はしか」「インフルエンザ」、また「山火事」といったイメージもここに重なる。突然静かに増えたり、バッと燃え広がったりするイ

メージか。学級崩壊でいう「同調圧力」も働いているのだ。『いじめで遊ぶ子どもたち』(村山士郎、2012年、新日本出版社)との見方も関係しよう。

「ノリ」と「学校らしさ」－いじめ予防の発想へ

ではさらに、「ノリ」自体の原因は何か。内藤は、学校が「せまい所に閉じ込めて強制的にベタベタさせる」人間関係を要求しており、学校が「ノリ」の秩序を作るとさえいう。そこで、全体討論で出た意見だが、子ども集団に閉じた「ノリ」の世界を、外から大人の論理を入れて変えることこそ、一つの対策となってくる。

ただし、内藤の提案は、警察を関わらせ、法で裁いてもらうという方向だ(『いじめ加害者を厳罰にせよ』2012年、ベスト新書)。政治が検討中の発想に重なる。

だが、学校の課題とは、いじめっ子を特定し、警察に頼って学校から追い出す前に、滝氏が「未然防止」というように、教師が、いじめっ子を含む子ども集団全体の論理を変貌させておくことだ、と私は思う。

例えば、私が提案したことは、「ノリ」に乗らない瞬間や、たまには一緒に「ノリ」から外れる仲間を作ること、「ノリ」から外れてたまには少数や一人で過ごすこと、それらも「善い」と別の価値を伝えることだ。

最近同窓会が多い私はしみじみと、変わり者の友だちがいたことを思い出す。色々な奴がいて楽しかったという話になる。彼／彼女は、皆が考えないことを堂々としたり言ったりし、活動に彩りを添えたものだ。

もう一つ提案したことは、大人も加わるホンモノの活動に参加して、「別様のノリ」を味わう発想である。地元の埼玉で、子ども会・少年団をやってきた自分に覚えもある。毎月1度や夏休み、春休みごとに、高校生や大学生、社会人の指導員に会える行事に参加し、自分も指導員になって準備をした。学校は学校で淡々と通ったが、学校の悩みが小さく思えてきたものだ。

逆に、子どもが学校のみや同学年の人との関係に閉じこもる現状が、「ノリ」といじめを生むと思える(学校化社会ということか)。そうした学校内外のシステムに、いわばエアポケットを空け、個人や互いの生活世界の方を豊かに耕すような実践や活動に、解決策を見出したい。

「懐かしく新しい」社会イメージで基礎づける

他方で当シンポから、ネットがつなぐ閉鎖集団といえるものも見えた。滝氏がいうにも「今の子どもには逃げ場がない。24時間、メールなどが追いかけてくる。…一日中つきまとう集団になってしまっている。」

しばしば大人は、今どきの子は兄弟が少なく、社会経験が少ないと言う。彼らが子どもであった高度成長期前の日本が『Always三丁目の夕日』のようだったからだ。だが、その雰囲気は、今も地方には残り(ネットやテレビゲームは逆に蔓延しているともきくが)、さらに発展途上国にもある。ならばそこでは、いじめが起こらない、または軽微にとどまる可能性もあろう。

理想の社会とは何か。先述の村山著の副題は「子どもたちに安心と信頼の生活世界を」となっている。私が3．11後、震災・原発・自然エネルギー関連の講演会・シンポ・ワークショップに200件ほど参加する中、特につかんだイメージは、ドキュメンタリー映画の題でもある『懐かしい未来』(エレン・ノーバック＝ホッジ)、経済成長にこだわらない『定常型社会』(広井良典、2001年、岩波新書)、半農半X(塩見直紀)といった、いわば「三歩歩いて二歩下がる」発想である。去年の3月、屋久島に滞在したが、観光業や文筆業の人々が、杉林と海、霧のコラボといった大自然に惹かれて移住し味わい、かつネットなどの新ツールも使いこなすという、「ハイブリッドな」生活世界に驚いた。つまり、新しい情報ツールを使いつつ、いったん前の時代(前近代)に部分的に立ち戻ってみた生活世界を編む発想だ。

おわりに　－学校教育の力を信じて－

では、学校で何ができ、学校はどう変われるか。生活科や総合的な学習では、昔遊びやお年寄りから話をきく実践が今や普通だが、ここに「懐かしい未来」を見て、子ども集団の質をも変えていく芽を見出したい。

また、ネットに使われず、使いこなすようコントロールする。その発想で、社会システムも「コントロール」する。仕方ない、こうやるしかない、このままでいいよね、でなく、「こういう社会を作っていくんだ」(附属小教員の発言)と動き出す。いじめでいえば、早期発見を徹底し警察と一体化する「警察化学校」ではなくて、そもそも「未然防止」が重要だ。

難しいことだろう。だからこそ、立場を越えて、ぜひ子どもたちとも協同し、システムを再構築する。上や外から翻弄される学校を、「生きるために学ぶ」場に戻すことも一案だろう。その子ども自身の練習としても、内藤が解体を言う学校集団はまだ要る。